

- 1 . 生活者の視点に立った科学知の編集と実践的活用

Living Science by citizen ,for citizen

 キーワード	科学知、生活者、患者学、エンハンスメント技術
Key Word	scientific knowledge, patient science, enhancement technology

1. 調査の目的

理科離れや科学嫌いが喧伝される時代において、科学技術は、生活者や市民からかい離れたものになりつつある。本研究では、生活者自身のための科学技術の在り方を問い直し、新しい科学コミュニケーションの形を提案することをめざした。具体的には、健康や医療などの身体知にかかわる分野において、生活者(患者)の経験知と、専門家(医療従事者など)の専門知の間の知のコラボレーション構築のために、「患者学」あるいは「ナラティブ・アプローチ」といった手法を他の分野にも応用する可能性についても検討した。さらに、将来の問題としてエンハンスメント技術の社会的受容性についての研究を行った。

2. 調査研究成果概要

(1)「患者学」- 身体における専門知と経験知のコラボレーション

健康や医療をめぐる情報は、生活者の最大関心事のひとつである。マスメディアや口コミなどを通じて様々の情報が氾濫している反面、正確な情報が伝わりにくい状況にあることも事実である。この分野では、日進月歩の科学技術が、新しい医療技術や医薬品の開発、あるいは栄養学、健康学の進歩などをもたらしているが、新たな科学技術が生活者の健康や医療に新たなリスクをもたらすという局面も増大しつつある。

そのような状況下で、これまでは医療従事者をはじめとするいわゆる専門家が、医療・健康に係る科学知に関するイニシアティブを握ってきたが、近年は、患者あるいは生活者の視点から、医療・健康にかかわる情報の理解・交流・発信を行う動きも出ている。

本研究では、「身体知」という視点から、まず、患者・生活者主体の心身・健康・医療に関わる知の編集を「医の知」としてとらえ、患者・生活者と専門家を結ぶ双方向コミュニケーションチャンネルの設定や第三者を介在させる場合のケーススタディをおこなった。

(2)エンハンスメント技術の社会的受容性

最新技術を駆使した人間の身体への増進的介入(エンハンスメント)が急速に現実のものになりつつある。いまやハイテク義足の陸上ランナーが好記録を残す時代であり、心臓ペースメーカー装着者は30万人以上、人工眼内レンズは年間100万件以上の手術実績がある。日本が突入する超高齢化社会においては、身体機能を補完や増進する技術は、医療福祉や介護といった領域にとどまらず、社会全体を支える必要不可欠な技術となるうとしている。しかしながら、身体に関わる先端技術の社会的受容条件は未踏の分野であり、患者・利用者側の科学知は皆無に等しく、社会的ルールづくりもこれからの問題となっている。

未来工学研究所では、市民科学研究室と共同して、この未解明のテーマにとりくむべく、エンハンスメント技術開発者、生命倫理研究者、専門家と数度のミーティングを重ねてきた。平成19年11月25日のサイエンスアゴラにおいて、公開セッション「サイボーグに未来はあるか? エンハンスメント技術の光と影」を開催した。

セッションでの話題は多岐にわたったが、主な論点は以下の5点に集約された。

治療(マイナスからゼロへ)とエンハンスメント(ゼロからプラスへ)は区別できるか?

エンハンスメントで「得るもの」と「失うもの」は何か？
 個人の問題から社会的文脈への展開
 戦争と平和の技術の相克(ディレンマ)
 人類はどこへ向かうか(あるいは向かうべきでないか)

未来工学研究所が2007年11月に実施した「カラダの未来に関するアンケート」(男女あわせて1180名が回答)では、治療や身体機能の回復に関わる技術(義手・義足、ペースメーカー、人工感覚器など)についての許容度(利用を認める率)は高いのに対し、身体機能を通常よりも増強する狭義のエンハンスメント技術については、許容度が低い(図1参照)。なかでも「デザイナーベイビー」や「ドーピング」については、ほとんどの人が否定的である。男女差のある技術としては、「ピアス」「美容整形」「アンチエイジング」については、男性よりも女性の方が許容度が高い傾向にある。総じて、技術の安全性が高いほど、許容度も高くなる傾向にあるが、技術の認知度と許容度には、ほとんど相関がないことも判明した。

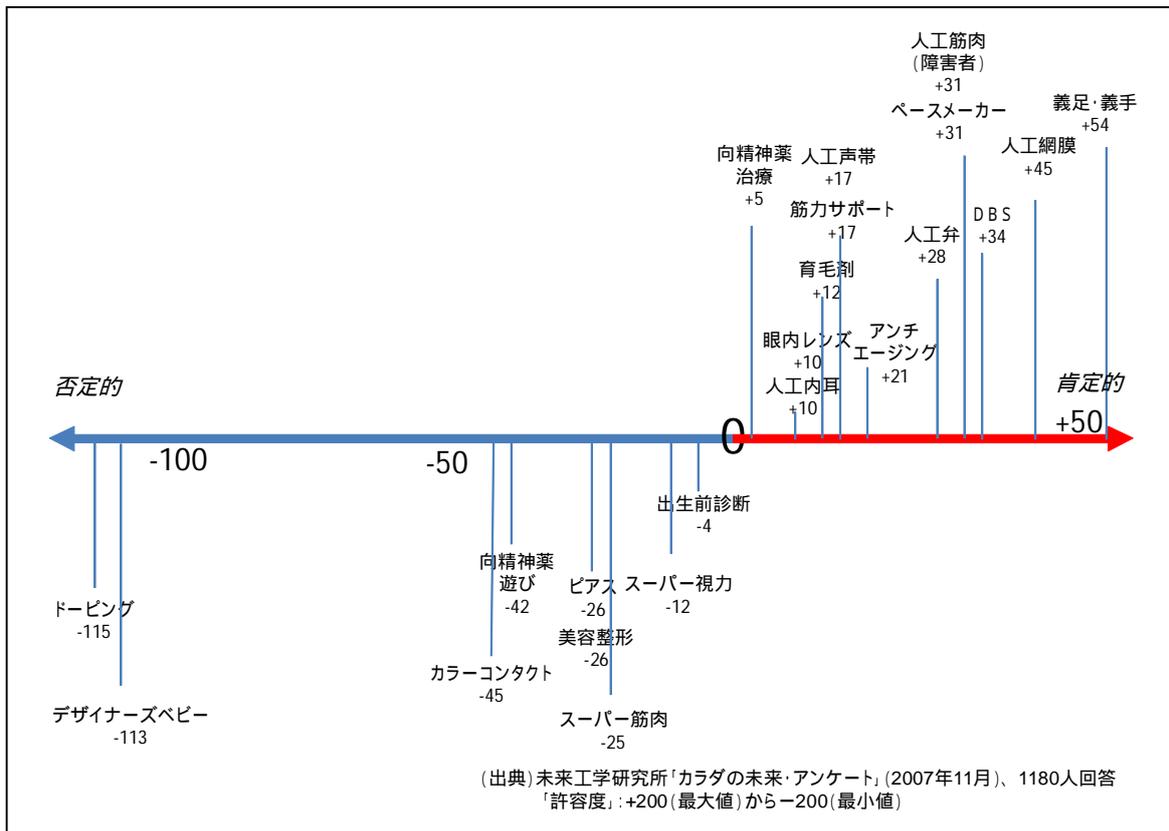


図1 エンハンスメント技術に対する受容性の意識調査結果

現状では、ほとんどのエンハンスメント技術は、研究者・開発者主導で研究開発が進められているが、最近では、利用者(患者、障害者、高齢者など)のニーズを反映した研究開発も一部で行われている。今後は、エンハンスメント分野においても、医療コミュニケーション分野で言及したような利用者と専門家をつなぐさまざまな媒介者(コミュニケーター、アドボケータなど)の存在・育成が不可欠となってくるものと思われる。媒介者に求められる資質・スキルとしては、医療福祉や生体工学などの専門知に加えて、臨床心理学、臨床社会学さらにはMOTやSTSといった社会技術分野のノウハウが重要になってくる。